

339
507

新
卷
案
内
記

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



039
509



坂井河水著

新倉桑田記

序

富源の開発産業の振興と云ふが如きは、世人の期せずして唱和する所なりと雖も、自ら進みて新らしき運命を拓らくの慨あらずんば、何等實際の成功は、望んで得べからざることを期す、殊に本縣人の多くは未だ時代的に覺醒せず、利権の多くは往々他の専有に歸し、殆ど主客轉倒の觀なくんばあらず、近くは石油事業の如き、鑛山事業の如き、比々皆然らざるなる之れ實に吾人の深く遺憾とする所也、茲に於てか達觀一番自活自動の眞意義に徹底進みて自ら新らたなる運命を拓らかすんばあるべからず、

新屋町案内記を編して、其の町勢を紹介せんとする所以のもの、單だに當面靜止の狀態を記するに止まらず、新屋町將來の發展に資すべく、町民の自覺を促進せんと欲するものなり、之れが爲めには産業の振興元より閑却すべからずと雖も、土地繁榮の一要素たる海水浴場の發展に就て、吾人の希望更らに大ならざるべからず、而して勝地の開發と云ひ、古趾舊蹟の保全と云ふが如き趣味ある叫びの我が東北の一角に響けるは、實に最近のことなれども、青

大正 10. 20
内交

森縣に於ける十和田湖保勝會の如き、岩手縣に於ける中尊寺保勝會の如き、いづれも企劃に對して熱烈なる、到底本縣の餘りに冷やかなるに比ぶべくもならず、吾人の所謂顯勝政策の必要を唱導するは、其實を將來に收めんとするに外ならず、趣味の向上と云ひ、精神の慰安と云ひ、物質的の活動に對して、更に新彩を放たしむる要素にして、顯勝政策なるものは、實に其の基礎たるべきものなり、羽越鐵道完成後の新屋町は、其の繁榮の中心を、海水浴場發展の方面に轉するや必せり、而して生産事業の振興を企劃し、兩々相俟つて新屋町の未來を華やかならしめざるべからず、吾人の古老に問ひ有識者に聞きて、案内記を編纂し、以て新屋町紹介の資に供せんとするもの亦決して徒爾ならざるべきを信す。

大正三年九月

堀井汀水識

新屋案内記

目次

- 序文
- 新屋途上の風光
- 海水浴場の盛観
- 運動上の設備 將來の企劃 名物の改良
- 名勝舊蹟
 - 勝平山 勝平寺 天龍寺 實相寺 諏訪
 - 神社 日吉神社 栗田神社 石山の觀音

- 鹿島祭りご七夕
- 歴史上の新屋
- 町勢の一斑
 - 青年會 尙武會 思交會 農會 漁業組
 - 合 勤儉貯蓄
- 大森山と潮吹湯 昔の渡し 新川と古川
- 松壽園の花卉 鈴木氏の園藝 柳の湯
- 大門家の玉椿 森川家の名松 舊馬場跡
- 舊砲臺跡 御成街道 榎の古木 陸軍射
- 的場 ハイカラ道路

○重要輸出入品

○新屋の蠶絲業

○有望なる醸造業

○白玉粉と鹽汁

○其他の産物

勝平山と副産物 紅花染 染料と香料

氷豆腐と菊海苔 魚類 氷と雪 名物諸

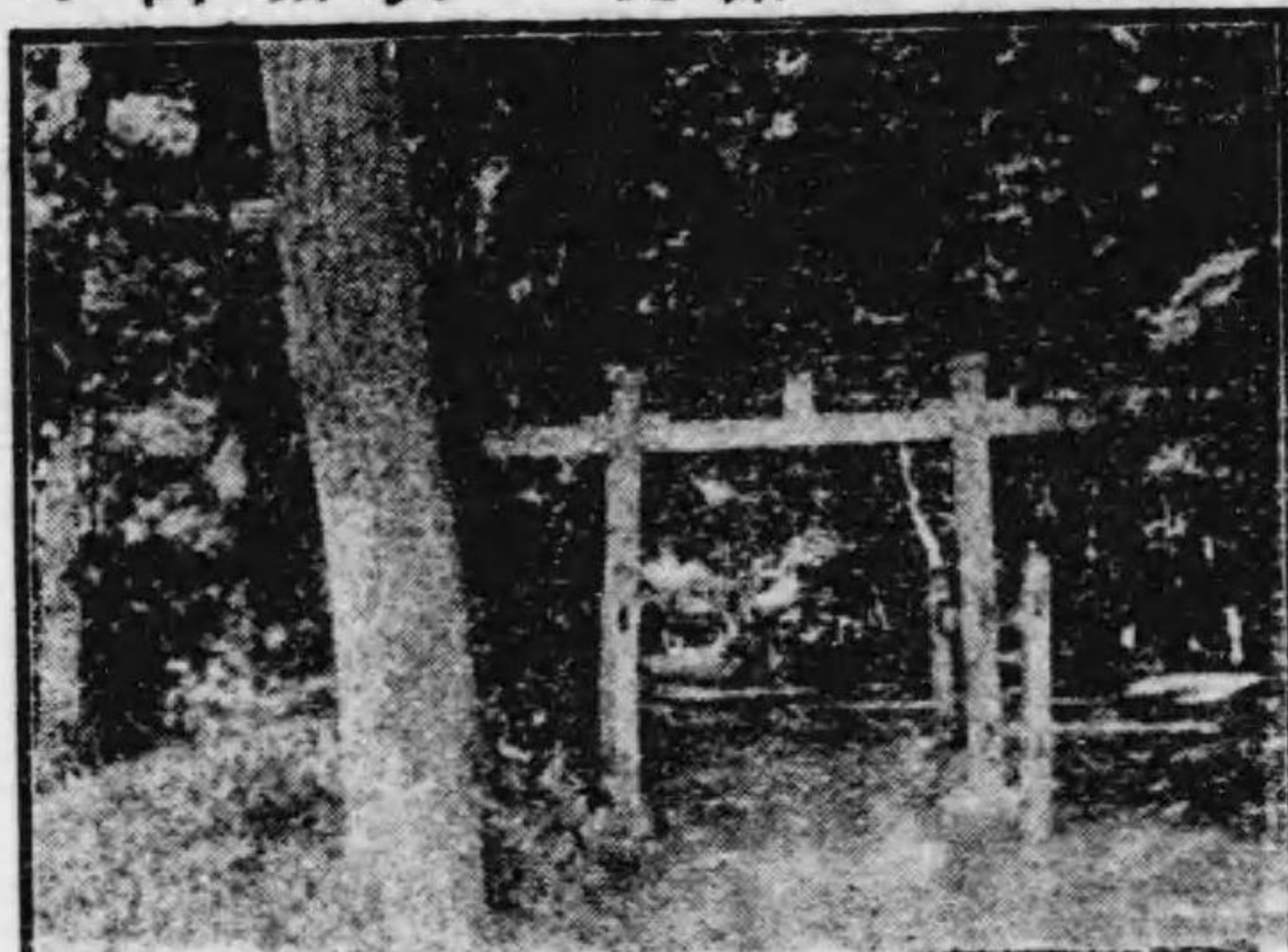
越 果實と蔬菜 人造石と土人形

○生産業の將來



●新屋途上の風光

新屋濱の海水浴に遊ばんとするものは、流車を秋田市に降りて一里二十丁の間を俾若くは自動車を驅るべし、然れども道路平坦砥の如きが故に、徒歩途上の風光を探りつゝ行くは、最も趣あり、秋田市馬喰町より五丁の畷を中に挿みて、左右に萬項の稻田穰々たるを眺め

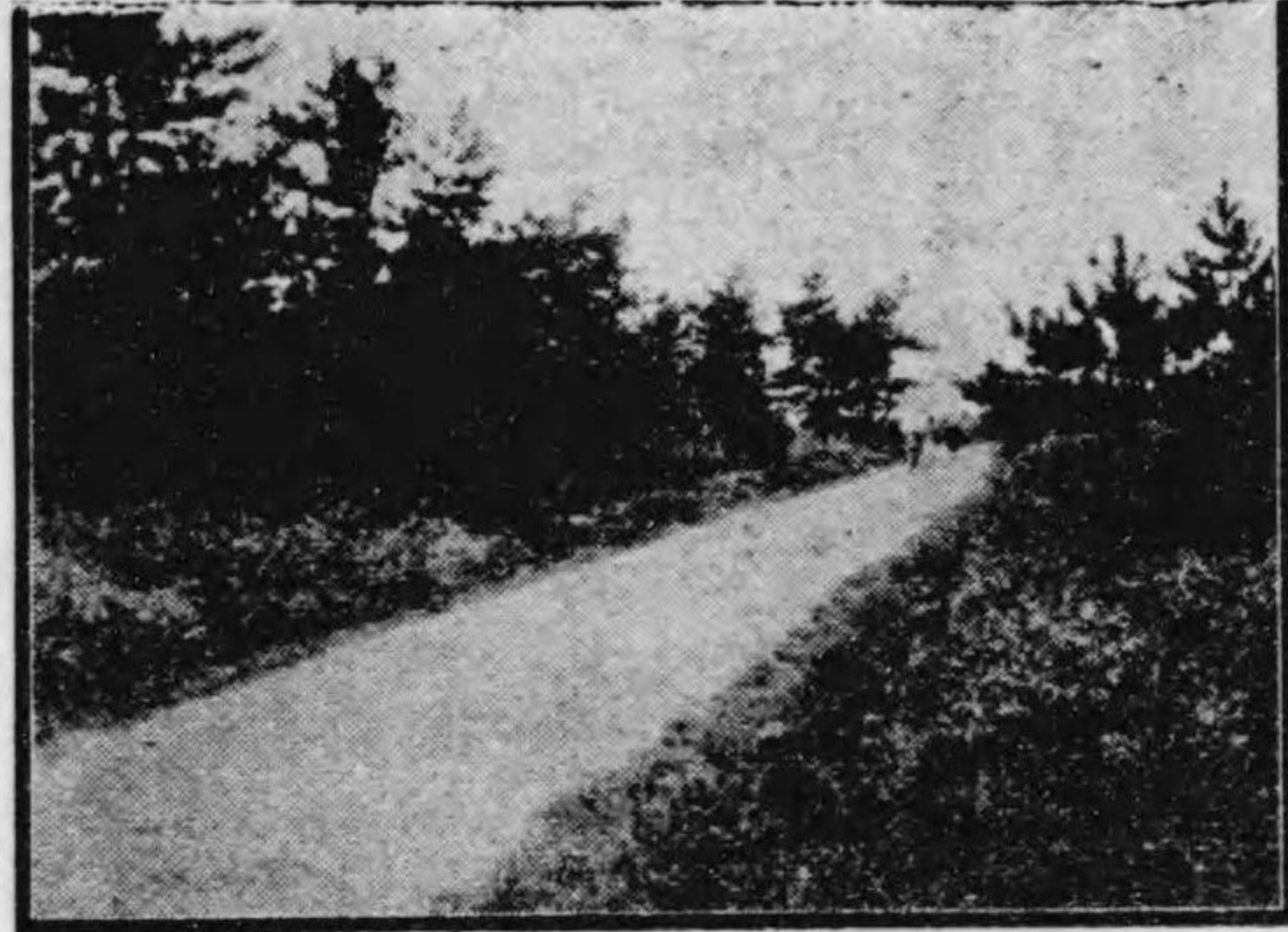


社 神 社 總

▲秋田市より一里二十丁▼

て、川尻村に至れば幽邃閑寂なる總社神社なり、古樹葱鬱として自ら森嚴の氣にうたる、清澄なる秋の空晴れやかなるに太平の峰紫霧を吐くが如きたゞすまゐるを仰ぎて、紅葉絢爛の美は追がに此境内にも溢るゝを見る、總社は實に一千百餘年の古社にて今も昔も銷夏の適地として、市民の遊樂する所たるのみならず、社前の長堤數百株の老櫻ありて、花燎爛の春のながめ飽かず覺ゆ、
『お延井戸』に戀の昔を偲ぶも可なり、

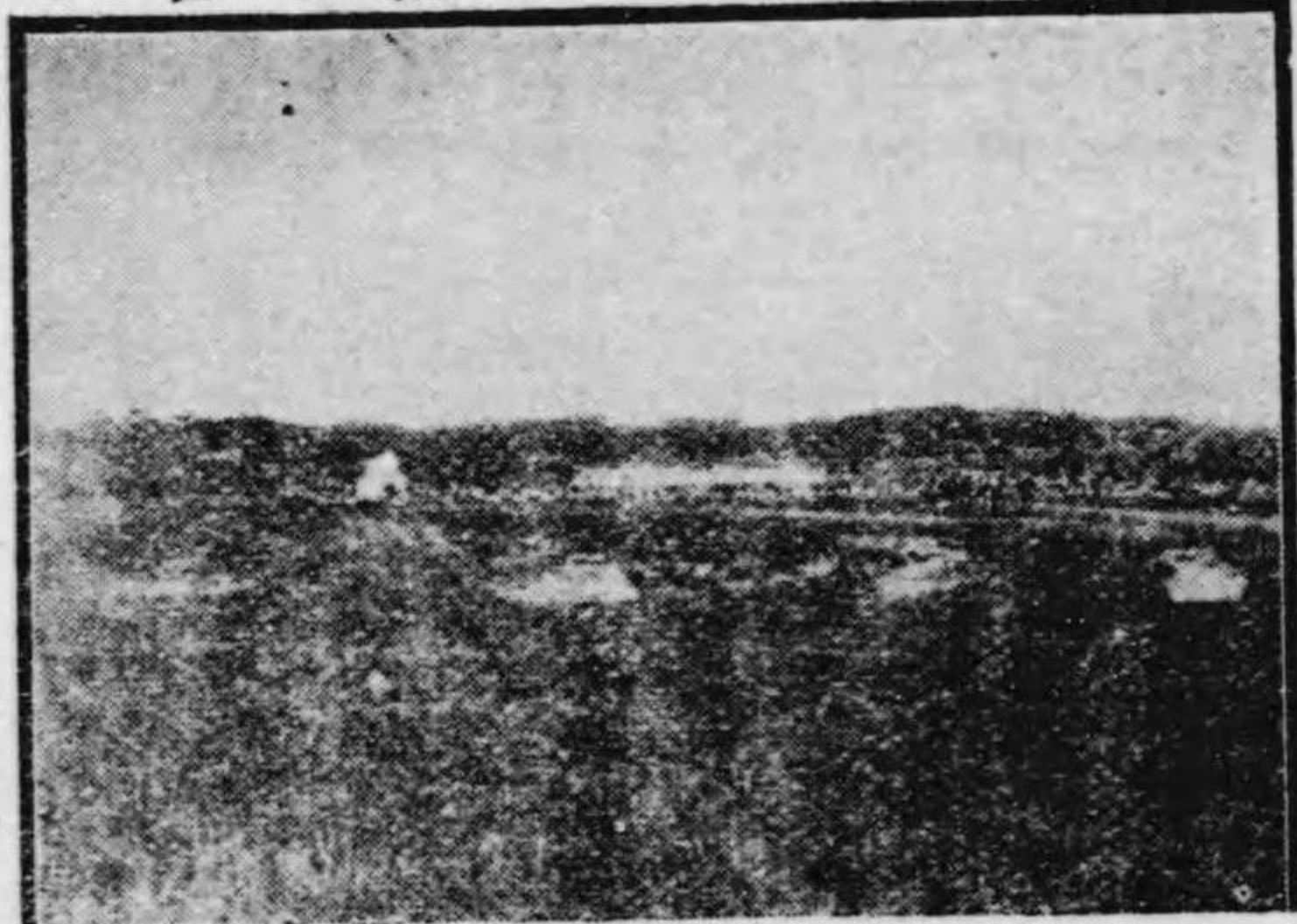
さては『瓊宮神社』の歴史の跡を探ね、『箱崎稻荷神社』に佐竹遷封の昔を訪ふらへば、『御休みの松』亭々として、南天の大樹も道がに懐古の情を惹く、『鐵砲所跡』は寂びれにさびれて、野草たゞ離々たるに、秋は蟲の音の衰調に詩人の吟情を唆る、『小夜庵』は今は其の廢跡だも残らねど、『降る中に降り込む音や小夜時雨』五明の風懐忘れんとして、尙餘韻の名残りとの場前には近時三四の掛茶屋建て列ねられて、來往の客をして旅の疲れを癒せしめつゝあり此所



大濱街道

どむるぞ床かしき、『一條院』は幽靜にして、雅興を惹くの地なり、『東光寺跡』松慶寺『蓮入院』は古刹にて『鐵座跡』は錢座置かれし地なり、『鍋子山の土人形』は安永天明時代伏見の人形師が來りて土隅を製造せし所にて、八橋人形の祖先なり、斯くて新川橋畔に至れば、山河の眺望晴れやかに開られて心氣おのづから爽やかなるを覺ゆ、コンクリートの道路にさしかれば、左右の桑園颯々として風翠りを吹き、青松遠く西一帶の丘を蔽ふ、射

より新屋町の北端に入るこゝ數丁にして、途は左右に岐る左りすれば酒田街道となり右すること數間にして更に右折すれば大濱に通する街道あり、坦路の右も左りも駄菓子屋の五六むさくるしくも建てられて、大濱の般賑にあやがるべく土産ひさぐ商店の、此の街道に風を仰ぎつゝ、迎れば、途はやゝ下り勾配となりて、日本海は森漫として眼界頓に開らけ、潮風輕



陸軍射場的場



栗田神社

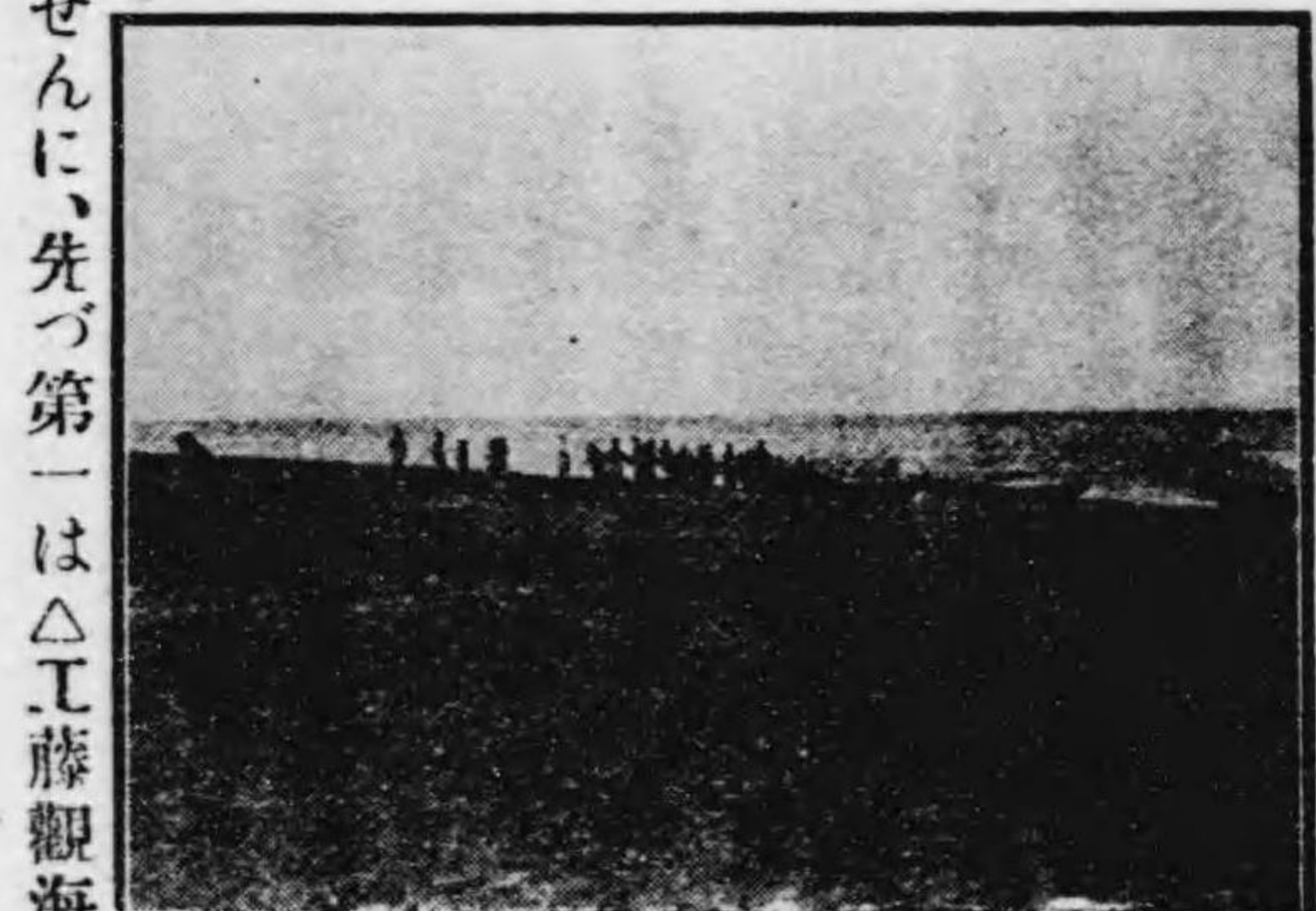
軒列ねたるが遺憾なれとも近き將來には新屋町繁榮の中心は、聽かて此所に其の位置を變ふるや必せり、青松の間を隔てたる小丘に、栗田神社あり、遺愛の碑に故人の徳

く衣袂を拂ふ、さながら舞子あたりの濱往く念ひす、清水湧く石山觀音堂に夏の疲れを忘れて、山海の景勝に耽くるも、亦興多き眺めなり、此所よりは直ぐ大濱なり。

●海水浴場の盛観

本縣の沿岸南に北に景勝の地少なからず、然れども其の開発保全の實舉らざると共に、海水浴の設備また時代的新彩なし、由利郡象潟と云ひ平澤と云ひ、海水浴場として世に現はれしは、新屋町より殆ど十年の隔たりを有す、而かも未だ世人の多くを招徠するを得ざる所以のもの、元より交通機關の不備之れが因を爲すが如しと雖も、其の紹介開發に對する熱心足らざるが爲めなり、然るに最近に於て、著るしく其の面目を改らため、名聲噴々たるは新屋町の海水浴場なり、十年前には洪濤風に荒ぶ寂びし響きに、砂漠の如き眞砂原には苦小屋の影すら物凄き念ひせられたりしを、明治三十八年渡邊幸四郎氏等新屋町の有志と相謀りて、荒磯のほとりに適當なる場所を撰らび、海水館を設備せるより、遊覽者漸く其の數を加へ、新屋の海水浴が世人の口頭に上るることなれり、其の後本縣前々知事森正隆氏の如きは、新屋町の發展上海水浴場の時代的設

備を必要なりとし熱心提唱するところあり、濱街道改修のため縣費を補助し、更に明治四十四年八月同町の有志渡邊幸四郎、工藤觀海樓主等をして、各地の海水浴場を視察せしめ、以て其の設備に新彩を帶ばしめんとせり果然視察後の新屋濱は面目頓に革たまりて、自働車の來往頻繁となり年々十五萬人收入貳萬圓以上なりと云ふ。

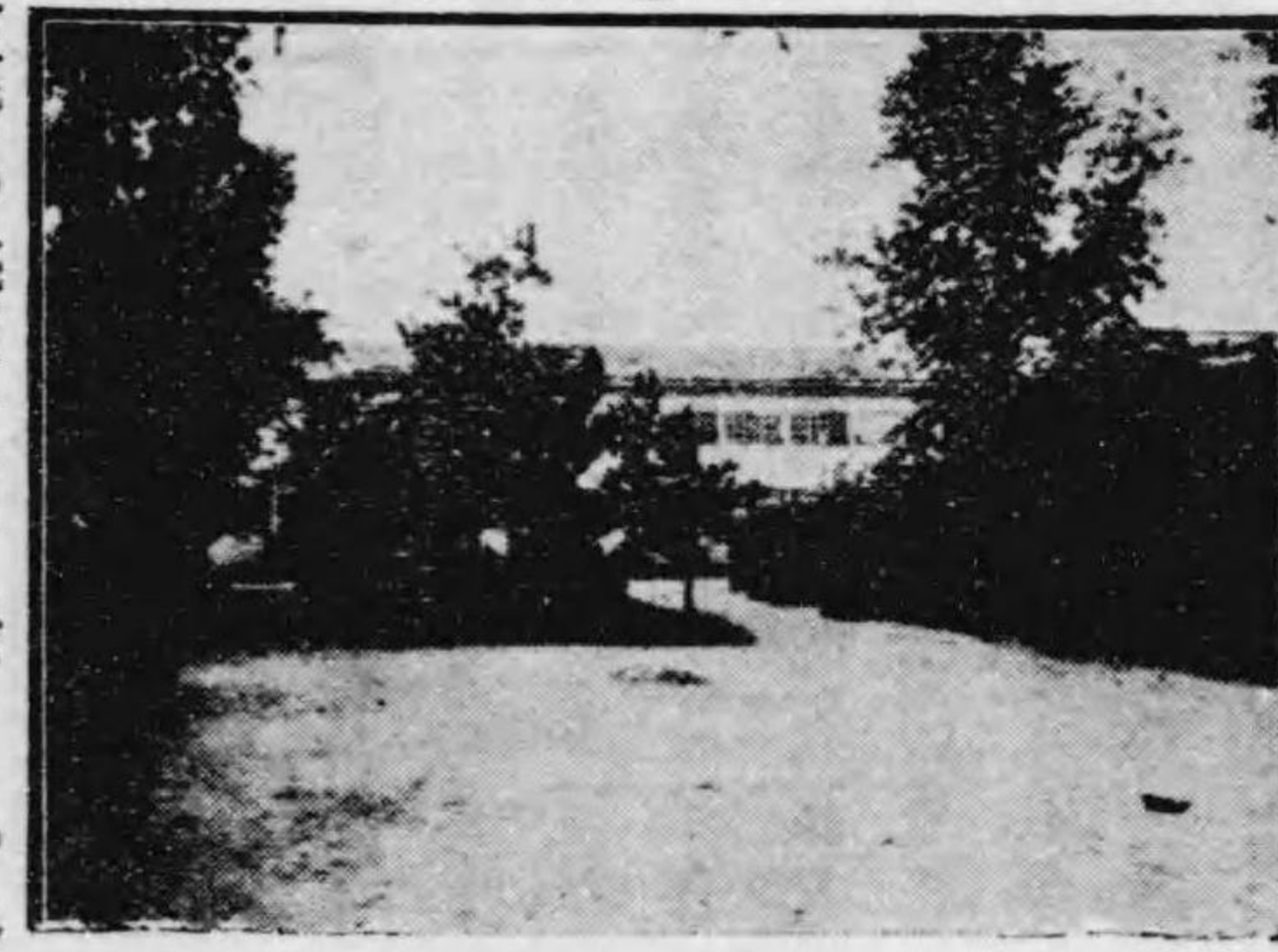


大濱の眺望實に曠濶なり、ある海水館の現状を記せんに、先づ第一は△工藤觀海樓なり、樓主工藤氏は十餘年來新屋濱の發

大濱の眺望實に曠濶なり、ある海水館の現状を記せんに、先づ第一は△工藤觀海樓なり、樓主工藤氏は十餘年來新屋濱の發

遠く滿韓及び浦鹽に對して、海洋森茫涯りなく、鳥海の秀峰は南方杳かに聳立し、芹田岬角より一灣弦の如くに白砂きらめき、漣波激澗たるほとり水禽の影清興を添ふ、北方男鹿半島の岬角をめぐりて眞帆鮮やかなるに、眞山本山寒風山の連峰遠く紫靄を吹いて、清涼の氣を海の此方へと送り來る、遊ぶものは、心いづれも暢々たり、斯の如き自然美の詩趣と情調との浮動しつゝある境に、幾多の遊覽者を満足せしめつ

展に盡瘁し、自ら進みて數百金を投じ、當局を勵まして今日の濱街道を完成せり、後ち更に各縣の海水浴場及び温泉場等を視察し、歸來堂々たる家屋を新築し近時新式の浴場を造りて、華麗清潔を極め、他に殆ど匹敵するものなし、其他小舟救命器等を設備して游泳者の便に供し、一意専心新屋町發展に注着して、時代と後れざらんことに努力しつゝあり、早晚電燈



△大門海水館 同館は三階の眺望を以て優さり、各室多く且つ廣きを以て、多人數の宴會等は
 △高島館 同館も大正元年舊來の位置より海岸に近く進めて、洋風に改築し、設備整頓せり、同館は海水浴場として、最小初よりの旅館なるが故に、従つて客の來學往頗る多し
 △三浦館と蓬萊館 同館は家屋の宏麗前二者に及はずと雖も、學生其他の輕便主義の客には持て來いの誂ひ向きなるが故に、千客萬來の盛況なり。

大抵同館にて催さる、

◎運動上の設備

濱には各種の運動機械設備せられて、運動上の便宜あるのみならず、遠望櫓、衣置場等ありて、夏時は縣教育會の水泳練習例年開催せられつゝあり、

◎將來の企劃

大濱海水浴の將來は、ますます有望なると共に、の生え易き樹草を栽植して、更に松樹を植付くべく、漸く松樹生長して、風致添はるに至らば石山



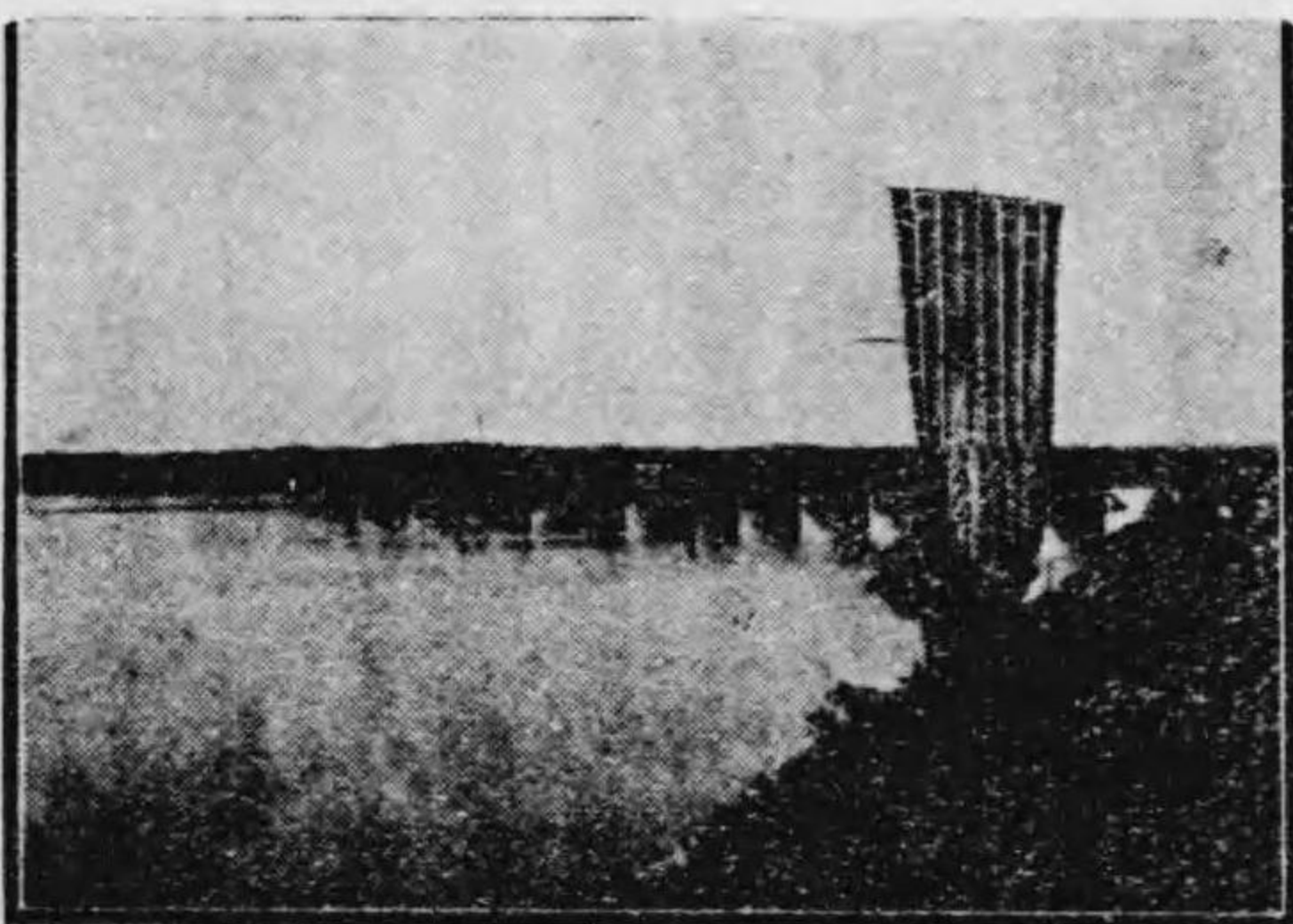
新屋町役場

之れが企劃は時代と伴ひ、尙一段の新彩あらしめざるべからず、現今の濱はたゞ一帯の眞砂原にて、一木の陰翳をこめず、近く勝平の松林に逍遙して、僅に涼を納れざるべからず。斯くては設備上の欠點たるを免れざるなり、近來は現今の海水浴場の周圍に、松樹の植栽を試み、築山または噴水の加工あらしめざるべからず、而して花卉の珍種を栽培して浴後散策上の工風あるを要す、砲臺跡のあたりより幾多の築山を造り、先づ之れに茱萸其他

の清水を樋にて引き來りて茲に噴水の設備あらしむべし、斯くて此の一小公園の適當なる地點に圖書縦覽所を設けて精神を修養せしめ、肉と靈との慰安に資せざるべからず。

◎名物の改良

新屋には名物は少くない、然れども名代元祖の諸越はかりでは、何となく心細きが故に、更に此點に向上的の新らしき試みなからざるへからず、と芭蕉煎餅若しくは滋養餡の類は、其の工夫と努力とによりて何程にても製造す得べし。



新川橋の景

海水浴歸りの土産品としては、尙幾多の種類は製造せられ得べし、今左に其の二三を記して新屋町民の参考に供すべし、
△松露の利用―改良の第一着として先以て名産たる松露の砂糖漬を製造すべし
海水浴客の新屋土産としては絶好の珍品なり。
△松皮餅と芭蕉煎餅―河邊の糯米は其の質の精良なる天下既に定評あり、故に新屋の白玉粉は昔より好評を博しつゝあるなり、白玉を原料として、更に松皮餅

△轆轤細工―松樹の無盡なる新屋町には松の利用法は一向に講せられず、依然として薪炭材料に供せらるゝのみなり、而して其の伐根の如きは殆ど廢物視せられ居るなり、今若し此の伐根を以て茶盆茶臺若しくは火鉢玩具類の轆轤細工を開始することゝなれば、新屋に一の名物を加へ得るのみならず、家庭工藝品として、適當なる一の副業が出来細民の救助一方法ともなり得べし。

◎名勝舊蹟

新屋町は今や秋田市附近の勝地として、漸く世上に喧傳せらるゝに至れり、こは海水浴場の新設せられたる以來のことにて、新屋町の將來は實に此の海水浴を中心として、益々其の町勢を發展せしめ得べきを信せざるべからず、今左に海水浴場以外古來の勝地古蹟舊蹟の梗概を紹介すべきか。

△勝平山―新屋は白砂青松の地なり、勝平山の翠松潮吹く風に蕭瑟として、清涼の氣横溢し、人をして爽快の感を惹かしめつゝあるが、昔は、日本海を限れる砂にて、小平山と稱し、三十三間堂の棟梁に使用せしハギ(桂の一種)は、此の山より出でしと傳へられしも、天長の大震に

埋没せし以來、雷夫れ一帯の砂丘徒らに風烈しく砂を飛ばし、新屋町の之れが爲めに受くる慘害實に甚だしかりしが、文化年中佐竹藩の砂留役兼林役栗田如茂氏自信を楯として自然の苛虐と、人事の逼害と戦ひ、千辛萬苦して松樹を栽植し、新屋町を始め秋田以外方十數里の風砂を防ぎ、且つ幾多の副産物を以て、後昆に恩資を残すを得たり、當時村民氏の成功を信せず、彼れが不動の確信を貶斥して、駄々之進と稱し、甚だしきは三部落の名主首を賄して失敗を必せしと云ふ、風霜一百歳松籟濤聲瑟瑟の響きは、清涼の氣を横溢せしめ、初茸、松露の名産地として知らるゝのみならず、狩獵地として秋田市近郊の絶好地たるを稱せられつゝあり、新川橋を渡りて御物川岸を下る、傘岩の對岸砂嘴翠松を戴せて、潮風颯々たる絶崖の上に軟らかき芝生に踞して眺むれば、秋田市より牛島二井田四ツ小屋の村落遠く杳かに聯なり續いて、左に太平の高峯雲を抽いて聳立し、右に高尾山女々木嶽等の峯巒四季其の景を新らたにして、自然美の神韵げに溢るゝか如く、月明家々の燈火幽かに離落する田園の眺め、俗興真に一洗せらるゝの念ひす、現はれる勝地なり。

△勝平寺 往昔勝平山に在りし大伽藍なりしも、天長の大震に埋没せり、八橋村寶塔寺境内に

在る仁王石像は其の遺物にて、御物川より掘出し、ものなりと傳へられ、横手町の正平寺は勝平寺を繼紹せしものなりと云ふ

△天龍寺 御物河岸に在る古刹にて、文祿年中の創立にかゝり龍光寺と稱せり、天和年中より天德寺の末寺となりて、鳳凰山天龍寺と改稱せり、眺望晴れやかに山水のたえずまる瀟洒なり。

△諏訪神社 祭神は建は天正年間の開基にて、眞宗九箇の道場たり、境内幽邃にて、



天龍寺

御名方命八坂部女命にて、明應年間赤尾津光政の建立にかゝるよし古記に見え、御諏訪長根と稱する地各今尙存す、寛永年間該社を鎮守として曹洞宗光龍寺を建立せられ、後文化年中に至り日吉神社に合祀せられし船靈神社を光龍寺境内に遷して社宇を建立し、同時に諏訪神社を船靈神社と合祀し今日に及へり、

△實相寺 革創年月不詳元祿元年秋田市本妙寺末寺となる日蓮宗なり、

△忠專寺 紫藤花を以て有名なる同寺は天正年間の開基にて、大樹古木葱鬱として自ら森嚴靜寂

の念ひあらしむ。

△日吉神社 同社は新屋町の南端由利街道に添うて、古樹森々たる間に鎮座す、江州日吉神社神体の餘材にて、坂本の別社と稱し千載の遺物なり、大同元年勝平山にありしを、永治年中今の地に移せしが、由利維平、赤穂津光善、最上義明等世々崇敬し、元和八年佐竹家の領となり、神事の奇習として祭禮の時神履を逆置き、おのつから前に向き直ほる時、神輿を昇き出すを例とす、世に之れを『新屋の山王沓任せ』と稱す。

△栗田神社 同社は海水浴場に至る濱街道の松林中に在り、勝平山殖林の大恩人たる秋田藩の砂留役兼林役栗田如茂氏を祭れるものにて、祠前に一大碑文あり。

△石山の観音 新屋町より大濱に通する新道は、明治四十二年改修せるものにて、十八町の間青松の間を縫ふが如く、海風清涼の氣を吹いて、宛ながら須磨舞子の街道を來往するが如き心地す、途上に一小丘ありて石山と稱す觀世音の小祠あり、昔より靈驗あらたなるを以て、海上に出漁するもの、此所の燈明を目標として歸航するの便を得たり、海拔數十尺の山頂に清水滾々として湧出し、眺望頗る曠濶なり、明治三十五年渡邊幸四郎氏自ら荆棘を拓らいて、一小公園とし以

て遊觀者の便に供せしより散策消遙の絶好地として、海水浴客の常に涼を納るゝ所となれり。

△大森山と潮吹瀉 地

は濱田村に屬すれども、新屋町の南端を距る遠からず、山頂の眺望開豁にて南島海山の秀氣に觸れ太平洋また近く北東の空を摩せんとするあり、森茫たる日本海を隔て、男鹿半島の三山雄姿を西北の天に誇る、潮風袵を吹いて涼氣すゝろに夏の疲



△望ヲ濱大屋新リヨ山平勝

を忘れしむ、山を下れば潮吹瀉あり、周回十數丁多く鯉魚を産し、製氷所また此の近くにあり、獵期此の邊一帶禽鳥群がるのみならず、兎其他の小獸また少なからず棲息す。

△新川と古川 雄物川を新川と稱するに對して、古川は新屋町の背面を流れて、一の中洲が桑

△昔の渡 雄物川に架橋せられざりし明治廿五年以前は芝の渡と三七の渡しとありて、秋田及牛島來往の客を舟渡せしチヨン齧の渡守りの姿昔を偲ばしめしが今は三百餘間の新川橋架設せられて、自働車が疾風の如くに飛ぶ時代と成りたり

園とせられ獵期は小鳥の群棲するを稱せられつゝあり、川には納涼の舟を浮ぶべく、漁舟垂綸の興を縦にするも可なり海水浴場が今日の如く發展せざる以前は、秋田市民絶好の散策地とせられしも、今は新川橋頭の茶店評判の姐さんも、其の氣焔を新屋町に吐くべく、自轉車を大濱に驅りつゝあり。

△松壽園の花卉―新屋町は園藝地として有望なる未來を有するは、識者の等しく認むる所なれども、未だ其の趣味の徹底せざるは遺憾なり、然れども近時果樹蔬菜の栽培漸く盛大ならんとするに至りしは欣ぶべき傾向なり、而して松壽園は富豪大島榮太郎氏の經營する所にて同家の向側にあり、和洋の盆栽草花等を陳列して珍卉異草少なからず、而かも深山高山の植物等も栽植せられつゝありて近く温室を建築して、早春より珍花の芳香を放たしむべく、目下熱心に研究中なり。
△鈴木氏の園藝―珍卉異草の温床栽植は兩三年前より同町に居住せられつゝある師範學校教諭鈴木俊雄氏の既に實行する所なれども、氏は世に吹聴するを好まざるが故に、知るもの甚だ少なきが如きも、烈風吹雪を飛ばす嚴冬に氏が温床を訪ねば、綠葉露滴るゝが如く草葉樹枝春の若やぎを示して、香花室に溢るゝを見ん、氏は園藝上の研究深く且つ蔬菜果樹等の栽植並ひに蔬菜

の温床栽培を實行して秋田市場の輸入を防遏せしめんとして、あるを知るもの稀れなるへし、氏は精力主義の人にて、各方面に於ける究研一として成さざるなしと云ふ。

△柳の湯―新屋町字木揚場と稱する古川の岸より湧出する冷泉なり、百餘年前村民某の小兒頭瘡を患へ憂日痛痒に堪へずして屢々悶絶す某試みに該泉を之れに灌ぎ之れを連續せるに日ならずして同家の庭園は幽邃にして清趣溢るゝが如し、而して枝葉偃々として左右七八間に擴がれる松の名



寺 專 忠

全治せりご、爾來奇効あるを知られ、明治九年五月浴場を創設し柳の湯と稱す渡邊儀右衛門氏經營す、

△大門家の玉椿―大門家は三百年前加賀より移住せる古き家系を有す、家々醬油醸造を業とす、門前に森齋として梵天の如くに繁茂せる玉椿の古樹あり、星霜二百餘年を経過せる稀代の珍木として知らる、

△森川家の名松―勤儉力行の人森川源三郎氏の徳風と共に推稱せられつゝある

木はまた同町に於ける珍木にて、松籟蕭瑟の響き數百年の歴史を偲ばしむるあり。
 △舊馬場跡—日吉神社の境内と相隣りして、西南數十間今は草茫々として、轉た荒涼の念に堪へざらしむ、低徊願望五十年の往時を追想すれば、古武士の騎馬姿が髣髴として繪の如くに浮び來る。

△舊砲臺跡—安政年間佐竹藩が海防の爲めに衛士を置きし其當時の砲臺は大濱海水浴場地の附近の砂丘なりしよし傳へらるれど風砂の爲めに埋没せられて、今は其の形跡だも認め難し、新屋町は何等か適當の方法を講じて、馬場の跡と共に標碑を建て、保全せざるへからず。

△御成街道—舊藩公が大濱に來往せし昔時の御成街道は、新屋町の中玉椿を有する大門家の南隣にあり、然れど新街道通せしより、此所を來往するもの稀れとなりたり。

△榎の古樹—新屋町より石田坂方面に通する里道を行くこと數丁にして、田圃の中に榎の古樹あり、二百年以前を経たるべしと傳へらる、往年耕地整理を施行せし際附近の土中より、古墳を發掘せしも其の時代明らかならざりしと云ふ。

△陸軍射的場—往時の三七渡通路より西に入り勝平山を拓ける廣茫たる平野なり地は由利街道

に添ひて、近時掛茶屋の四五軒並らふるやうになりてより來往の旅客は旅の疲れを癒しつゝあり。
 △ハイカラ道路—御物川の汎濫を防がんがために當時の縣技師牧氏は、新川橋以南數丁か間の道路をコンクリートに固めて、恰かも岩盤の如くならしめたるより此の稱あり、爾來汎濫することあるも之れが爲めに、道路の崩壞すること無きに至れり。

●鹿嶋祭りご七夕

六月五日(舊五月五日)の鹿島祭りは、新屋町第一の名物にて當日各町一個宛實にて船形を造りて意匠を凝らせる人形を乗せ、舳には數個の太鼓を付け若衆は頬冠りして之れを打ち、子供等は思ひくくの紛装をして

鹿嶋の送りシヨウ、く、く、く

寺のかけ送送りましよ「シヨウ」く、く、く

と云ふ古風の掛聲勇ましく全町を引廻はる其の美觀營ふるにもなし、

七夕には各町男女の櫓を建て、六日の晩には男子は笹の附きたる竹に燈籠を結び、行列を作り、

各町を掛聲して廻はる、女兒供は四角なる燈籠を持ちて横隊に行列を作り、

「幼者^{ヨウシャ}兒の燈籠は幼者々々ドウウ」

お寺の梨の木さ梨なつた「モエデ」く

「もげないささね」それ眠流しヨウウく

「ゴマン」の巻しきさ白菜房一本芍薬

「咲いたささね」うれ眠流しヨウウく

と聲張り上げ唄ひながら各町を廻はる。

● 歴史上の新屋

河邊郡は元來國府を置かれし出羽の河邊(田川郡)と同地異地にして、永正年中黒川豊前豊島城に居り、永祿中畠山玄蕃も茲に居りて豊島氏と云ひ、郡名も豊島郡と稱せられしが、寛文中川邊と云ひ、元祿年中河邊と書せり、同郡は東は仙北郡に南は由利郡に西北は南秋田郡に境し、太平川を以て秋田市に接続せり、町村數十四、面積四十一萬方里餘、戸數五千七百五十二、人口四萬八百二十二を有す、而して新屋町は郡内第一の名邑にて、東北は雄物川を隔たて、秋田市及び牛島

町に接し西は勝平山を以て日本海に臨み、現住戸數七百三十、人口四千七百二十四を有す、昔しは毛々佐田又は百三段と云ひて、勝平山下にありしが、天長年間の大震にて埋没せしより今の地に移り霜別と稱せしは此の地ならんと云ふ、文治年中源頼朝橋公業に毛々佐田、小鹿を與へしが、能代の大河兼任に亡ぼされしより、後ち最上領となり元和八年義俊其の領地を沒收せられんとせし時恰も佐竹義宣秋田城はなれり、當時の新屋町は四百六十戸を有せりと云ふ、後ち安政元年に至り佐竹義睦海防の爲め、衛士を新屋村比内南町に移住せしめたり、小西、栗林、倉田、森川、黒丸、渡邊等の十五家なり、明



大島の碑

由利郡と其の境城を接して、要害にあらざるを以て、百三段三ヶ村(新屋、濱田、石田坂)と、河邊郡下黒瀬、仙北郡強首の内宿村木賣澤村、館村及び尻引村と交換せり、即ち元和八年十二月十二日同家使令伊丹喜之助近藤勘右衛門來りて、家老梅津憲忠出檢濟みと

治戊辰の役佐竹義堯は親兵を率ゐて此の地に陣し、長濱口より侵入せんとする敵を防禦せり、義堯の新川口に轉陣するや嗣子義修代つて警備せり、當今山の手と稱するは當時の士族屋敷なりしも僅かに現存するは森川氏の邸宅のみにて、他は大抵維新後其の郷地に歸還せるよしにて、笠門の今尚ほ昔の名残りをとゞむれども、屋敷は概して桑園若しくは果樹園となり馬術を練習せし馬場の跡、扱ては砲臺の跡等いづれも寂びれに寂びれて、懷古惆悵の念ひに堪へざらしむ。

●町勢の一斑

新屋町の有する土地田畑山林は總計一千六十二町三反一畝十八歩にして、其の豫算は大正二年の調査にて八千九百拾參圓五拾壹錢貳厘なり、基本財産壹萬七百貳拾九圓四錢を有す、町民の職業を大別すれば農業九十五商業百二十八工業五十四戸漁業二十二戸雜業四百三十一戸なり、團體として公共的活動の中心となりつゝあるものには、農會あり、漁業組合あり、青年會あり、在郷軍人分會あり、婦人會あり、就中誇るに足るべきは勤儉貯蓄組合なり會員現在四百六十五人にて貯蓄金額二萬二千四百九十餘圓に上はりつゝありと云ふ、今其の重なる團體の現狀を叙せんに

△青年會 現在の團長は仙葉善之助にて、團員八十餘名ありて其の事業は松樹の植栽なり。

△尙武會 會長は仙葉善之助氏にて、青年の武道獎勵の爲め組織せられるものにて會員五十餘名を有し、武術道具數組を備へて毎年數回大會を開らき、若干の基金を有せり、

△思交會 文藝の趣味を養成すべく組織せられるものにて、毎月五の日同町忠專寺にて會合し、思想を交換すると共に、各自の辯舌を上達せしむるを目的とす、

△農會 森川元直氏會長となりて、果樹栽培を獎勵しつゝあり、

△漁業組合 高橋長之助氏組長にて、同町の漁業發展に努力し、北海道稼出人等をも取扱ひ、近時大謀網の計劃あり、

△勤儉貯蓄 如上記せるが如く同町にて最も誇るべき組合の一にて、森川氏主催のものと、川口長藏氏主催のものごありて、金融上貢獻する所大なり、

其の他町の事業としては、明治二十九年以來約百八歩に亘りて、一百萬本の松樹を栽植して其に成功を見つゝあり。

●重要輸出入品

新屋町の重要物産中更に有望なるは、蠶絲業と醸造業とを以て、其の最とすべきも、他の生産物また決して少なからず、今其の統計による輸出入の種類及び數量を擧ぐれば、實に左の如し、

△輸出清酒三千二百石△米一千八百石△醬油六百石△燒酎二百石△白玉粉十一萬斤△織物五千三百八十二反△干菊二十一貫△蠶二百九十一石五斗△蠶工品千八百八十反△大豆四百五十貫△小豆百二十石△鮮魚八千八百六十貫

此の總額は一年約貳拾壹萬四千四百八拾七圓五拾貳なり、

△輸入米三千八百石△大豆二百五十五石△鹽物六百貫△麥粉九千七百九十二貫△果物八百貫

此の總額は一年約七萬六千八百五拾貳圓なりとす、

●新屋の蠶絲業

秋田縣蠶絲業の發達せる歴史を概述するに安永年中佐竹義敦の時代に、福島縣伊達の人石川瀧右衛門なる人より創まり、文政年に至り、其の發達著るしかりしが、天保年中の飢饉の爲めに頓挫を來せり、然るに爾來秋田市に川尻組なるものあり、川村永之助等を中心として、其の活動目醒ま

しく遠く伊太利に蠶種を輸出し、年額八萬圓に上りしも、是れ亦微粒子病發生の爲め挫折せり當時の川尻組事務所は、現在の監獄署敷地内なりと云ふ、御物川沿岸より新屋町に至る街道を挿みて、翠葉風に颯々たる萬頃の桑園は、實に當年の名残りなり、而して新屋町に於ける現今の養蠶専門業は二十五戸にして、年産額七千貳拾貳圓に上り、其他副業としては殆ど各戸之れを營まざるもの無きが如し、繭の産額實に二百九十一石五斗なりと云ふ、大正元年全町の同業者三十軒聯合して、稚蠶飼育共同組合なるものを組織し、各戸の製繭を全部組合にて販賣するの方針を採り江間町長之れが組はとなり、佐藤東四郎氏副組長たり、而して一方に於ては渡邊幸四郎氏多年獨力蠶種業を營み、蠶種の供給は縣内各地に及び益々其の發達を企及しつゝあり、故に同町春秋産繭額は貳萬圓以上なるべしと云ふ、新屋町の氣候風土は桑樹の栽植に適せると共に、蠶種の製造地として、縣内無比と稱せられつゝあるを以て、町民の向上的努力如何によりては、尙ま

す、其の面目を草らため、時代的發展を實現する敢て難きにあらざるべし。

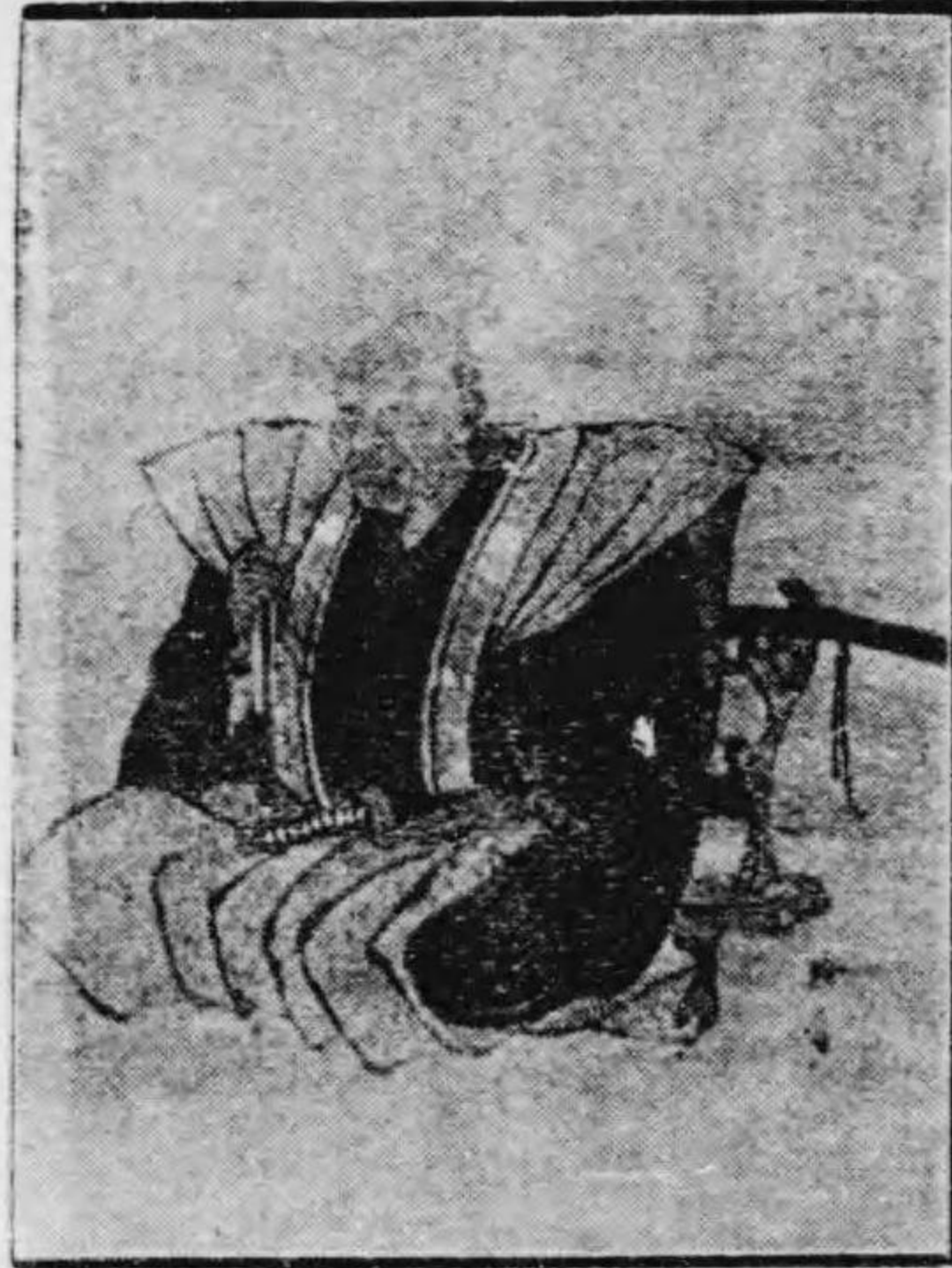
●有望なる醸造業

新屋町の氣候風土は酒造地として恰適なるが故に、年次其の質改善せられ、芳醇實に年額三千二百石、秋田市醸造家の壘を摩せんとしつゝあり、縣内に於ては湯澤町を除いて、他に匹敵するの地なしと稱せられ、北海道及び近縣に漸く其の販路擴張せられ現今の酒造家は八軒あり、而して酒に次ぐは味噌、醬油、酢にて、いづれも兼業なり、酢は年産七十石、醬油は五百石、味噌は四萬貫にて、販路は縣内及び北海道等に擴張せられ、現今の營業者は六軒にて高橋九郎左衛門氏は組長、大門彦右衛門氏は副組長たり。

● 白玉粉と鹽汁

新屋町の特産物として、將來有望なるは白玉粉と鹽汁と之れなり、元來河邊郡は糯の産地として有名なるが故に、從て之れを原料とせる白玉粉は、新屋町の特産として昔より既に聲名を馳せつゝあり、現時の製造元は七軒にて、年産十一万斤壹萬參千圓内の上ぼり、販路の重なるは北海道にて、縣内各地は勿論近縣にも漸次擴張せられつゝあり、今若し更に一大製造場を建設して、之れが發展を企及すべくんば、聲價更に今日に倍すべし。

また新屋特産の一なる鹽汁は年産百七十石を越え、上等一升貳拾錢以上に縣内各地に販賣せられつゝあり鹽汁はいづれの地方にも製造せらるゝも、其中斯くの如く多大に製造せられ、且つ多方面に販路を有するは、新屋町を除いて他に之れ無きを知らざるべからず、鹽漬の魚肉より精製せる汁なるが故に、薄鹽煮の味ひより、更に一層の佳味を有せり、西洋料理に用ひらるゝ魚肉製のソースは、高尚にして、且つ防風、菜葉、葡萄、玫瑰、蔓梅等に至るまで、一年額壹萬圓餘の收入あり、



栗田如茂氏肖像

ハイカラなるを稱せらる、故に新屋産の鹽汁も、其の製造法に注意を拂ひて、精良なる質たらしめんには、將來更に有望となるべきや必せり。

◎ 其他の産物

△勝平山と副産物 勝平山に幾多の副産物ありて、薪炭材は勿論木莓、松露、初茸

△紅花染 古への名産なりしも今は管名残りの唄に昔を偲ばしむるのみなり『昔し馴染と紅花

染は色がきめても黄(氣)が残る。
 △染料と香料—玫瑰の根は秋田八丈の染料となり、其花は香水の原料及び支那紅茶の香料に用ひらるゝと云ふ。

△氷豆腐と菊海苔—新屋の氷豆腐は其の供給昔ねからず、販路を擴張すべく多額の産出なしと雖も、其の企劃を改らためんには、將來有望なり、また菊海苔と稱するは菊の花を蒸干として海苔状とせるもの菊花に乏しき季節の料理用として珍重せらる。

△魚類海に昔藩公の食膳より、外に供すること能はさりし喉黒より蝶、鯛、小鯛、甘鯛、金頭、鹹、飯鮪、鰻、鱒を産し河よりは鮠、鮎、鱈、沙魚、鱈、鮭、八つ目鰻等を産す。

△氷と雪—氷と雪とは大半秋田市に供給せらる年額五千圓以上なり、
 △名物諸越—新屋諸越は舊藩時代より珍重せられ、味變らず角の崩れざるを以て名あり、一斤大約參拾五錢位なり

△果實と蔬菜—新屋には蔬菜の栽培を有望とすれども、未だ此の方面に於ける發達十分ならず、然れども果實類に至りては、漸く其の面目を新らたにし、殊に葡萄の如きは近時盛んに栽培せら

れつゝあり。

△人造石と土人形—近時有望なりと稱せられつゝあるは人造石と土人形となれども、其の販路未だ十分ならず、然れども人造石の用途は、漸く世間の知る所となれるを以て、將來名物の一とせしむべきせらるゝや必せり。

如上の生産物を統計的に摘記すれば、大要左の如し。

種類	數量	生産額	市場	種類	數量	生産額	市場
清酒	四千五百石	貳拾貳萬五千圓	秋田市土崎北海道	醬油	六百石	貳萬四千圓	同
味噌	三萬二千貫	壹萬壹千貳百圓	同	酢	四百五十石	九千圓	同
白玉	七千箱	貳萬千圓	近縣北海道	石鹼	八拾圓	永	豆
水豆腐		四千圓	秋田 東京	織物	三千五百反	三千五百圓	秋田市縣内
菓子餅越		四千圓	秋田市縣内北海道東京	菓子繩	五萬圓	五萬圓	北海道
蠶種	五千枚	貳千五百圓	縣外縣内北海道	繭	百五十石	壹萬五千圓	同
眞綿	二十貫目	壹千圓	朝鮮北海道	麩		五千圓	縣内北海道
竹細工		壹千圓	秋田市近郷	鹽汁		貳千圓	秋田市縣内北海道

玫瑰根皮	參千圓	秋田市	松葉	五千圓	秋田市近郷
松露初茸	貳千圓	秋田市縣内	菜葉實	五百圓	同
生糸	四十五貫	同	水と雪	五千圓	同
木材	貳萬圓	秋田市北海道	米麥	四千圓	秋田市土崎
燒附	百石	七千圓	桑葉	四十萬五千貫	近郷及縣内
		北海道		貳千六百圓	

此他に干菊果實雜穀蔬菜鮮魚の類あり輸入品の項を參酌すへし、

●生産業の將來

新屋町は工業地として、繁榮の要素とすべし、而してまた園藝の地たるを得べし、秋田市に接近するが故に商業地としては、十二分の活動抑も覺束なし、若夫れ羽越沿岸鐵道の成るの日は生産品に對する販路の擴張を企圖する容易なるべからんも、生産物の増加と精良とに留意するところあらずんば、販路の擴張も、また得て望むべからざるべし、吾人は新屋町の將來に對して、聊か所懐を左に述べべきか。

第一は蠶業と醸造業と則ち之れなり、蠶業は之れを専門業とするより、寧ろ副業として利益あ

るは識者の夙に認むる所也、新屋町は現時此の方面に注意するに至りしは、蓋欣すべき傾向なり、清酒の醸造五千石未だ灘の醇に及ぶ能はずと雖も、近時著るしく其の質精製せられて、地酒の雄を以て稱せらるゝに至れり、斯くて意を須る深からば、昔年ならずして、輸入を防遏するを得べきか。

白玉粉及び澱粉の製造は、其の企劃を新らたにして、一大工場を設立するも、其の聲價と需用とは、將來ますます増加すべきや疑ひなし、更に有望なるは蔬菜と果樹の栽培なり近時此の方面に着々歩を進めつゝあるは、時代的覺醒として、吾人の深く欣ぶところなり、更に進みて植樹に一層の努力を加へざるべからず、新屋は必らずしも松の生育にのみ適せりとせず、須らく他の適當なる潤葉樹を植栽すべく、研究を新らたにせざるべからず。

牧畜方面には豚の飼養地として、最も有望なるに、町民の未だ此の方面に着目せざるは、遺憾とせざるべからず、海に對して漁業の改善に努むるあらば、其の面目を改むる決して難事にあらず、然れども海の開發遅々たるは本縣人の通弊なるが如く、いつれの地も十二分の活動を見ざるは、聊か心外の感なくんばあらず。

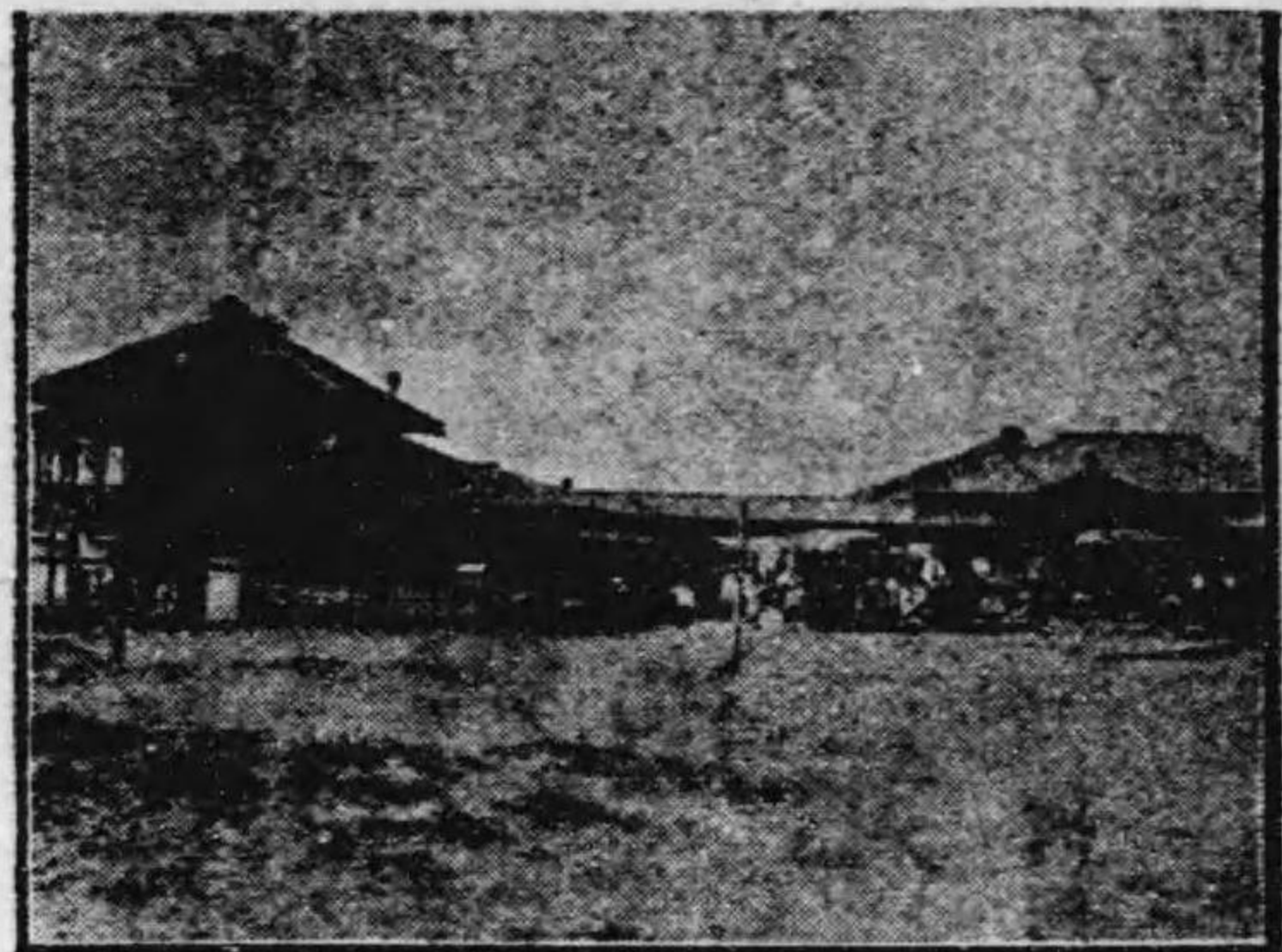
昔は海千石河千石の稱ありし新屋町に於て御物川の改修は當面の大問題なり、否單に新屋町の問題たるのみならず、本縣の急務なりとす、其の改修は國家事業として、已に其の調査を終了せしと雖も、實現を見ざる間は、水害の慘年次淪ることなく、寒心に堪へざるを覺ゆ、其の豫備的河口をいづれの地に鑿通せらるるや、未だ研究中なるが如しと雖も、新川橋の上流數丁の地點よりして新たに運河的加工によりて、勝平の山腹を大濱に一氣呵成に流出を促かす、必らずしも不可なるべからず、兎に角一日も早やく其の河身を改修せざんば、水害は依然として河身ますます淺せ去り本縣第一の大河も貧弱遂に其の價値亡ふるに至るべくして、新屋町が千石の稱を再ひするが如きはまた之れ到底望んで得べからざるべし。

大正三年十月五日印刷
大正三年十月十五日發行

編輯兼 秋田市保戸野諏訪町
發行者 堀井源次郎

印刷者 秋田市大町二丁目三十番地 中村政五郎
印刷所 秋田市土手長町中丁三十番地 秋田田社
發行所 秋田市大町二丁目 秋田民報社

海水浴場



旅館 工藤本店

秋田縣新屋町

支店 工藤觀海樓

新屋大濱



味噌
油 釀造元

秋田縣新屋町

川口長藏

三光舎精米所



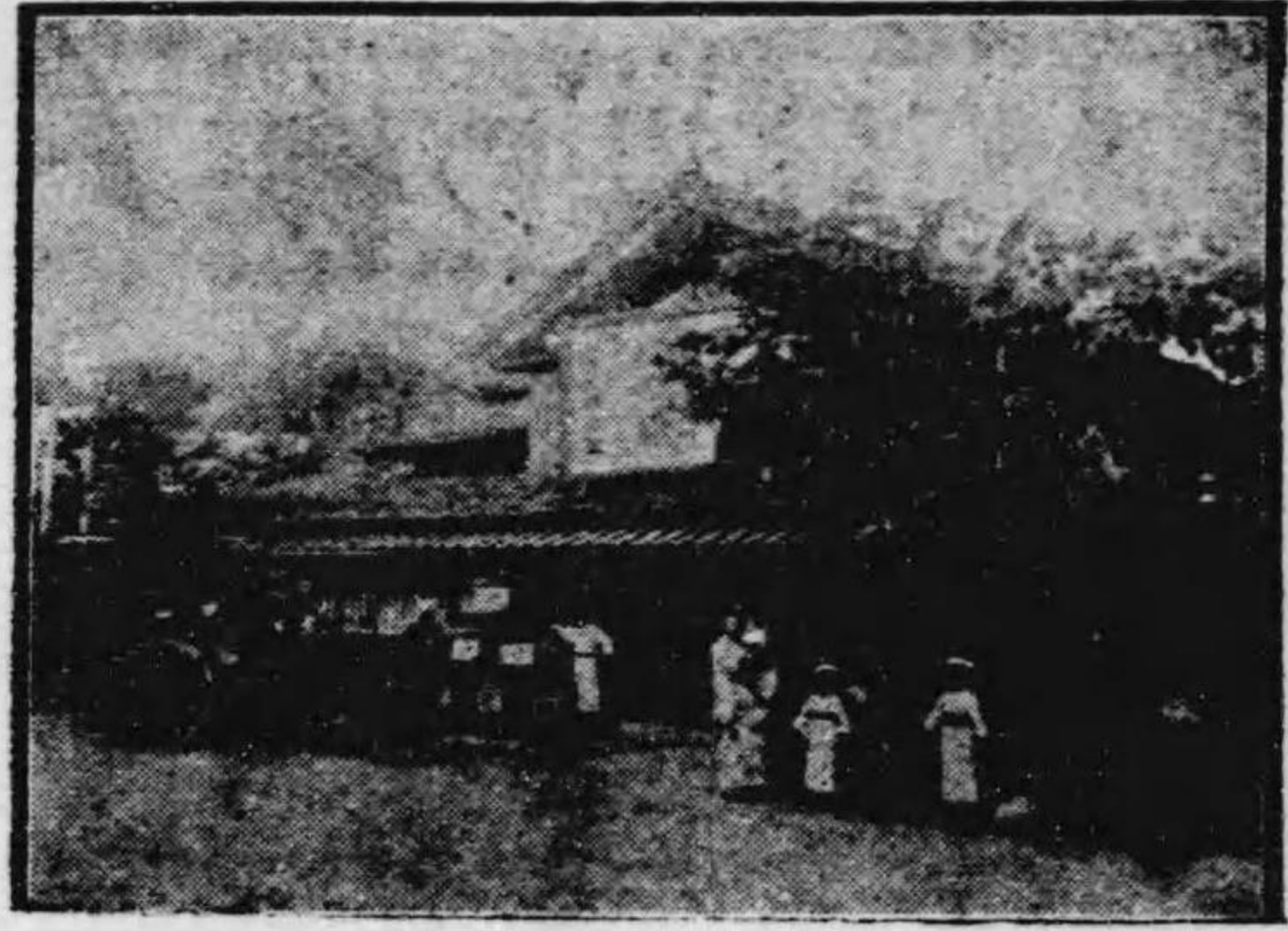
機械を利用するを以て搗減り僅少にて質精良なるを其の特色とす

石臘
白玉粉
菓子粉
製三
造光
元舎
河邊郡新屋町

海産海魚生魚商
菓物委託販賣商

今安部喜一郎

羽後國新屋町



酒銘 君か代
 若 戎 釀造元

惠比壽焼酎



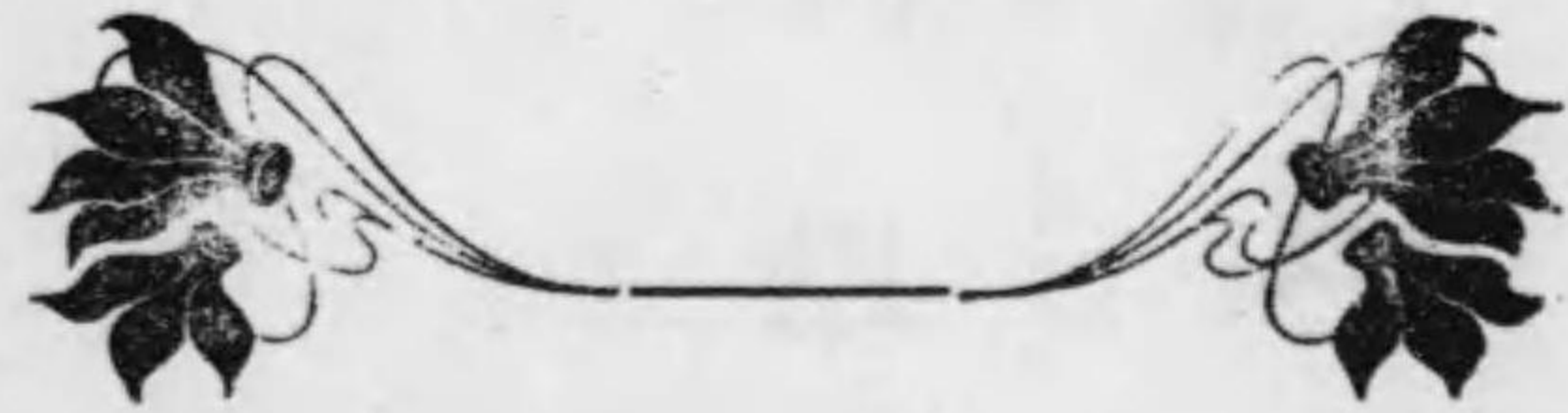
秋田縣新屋町

大 嶋 源 助

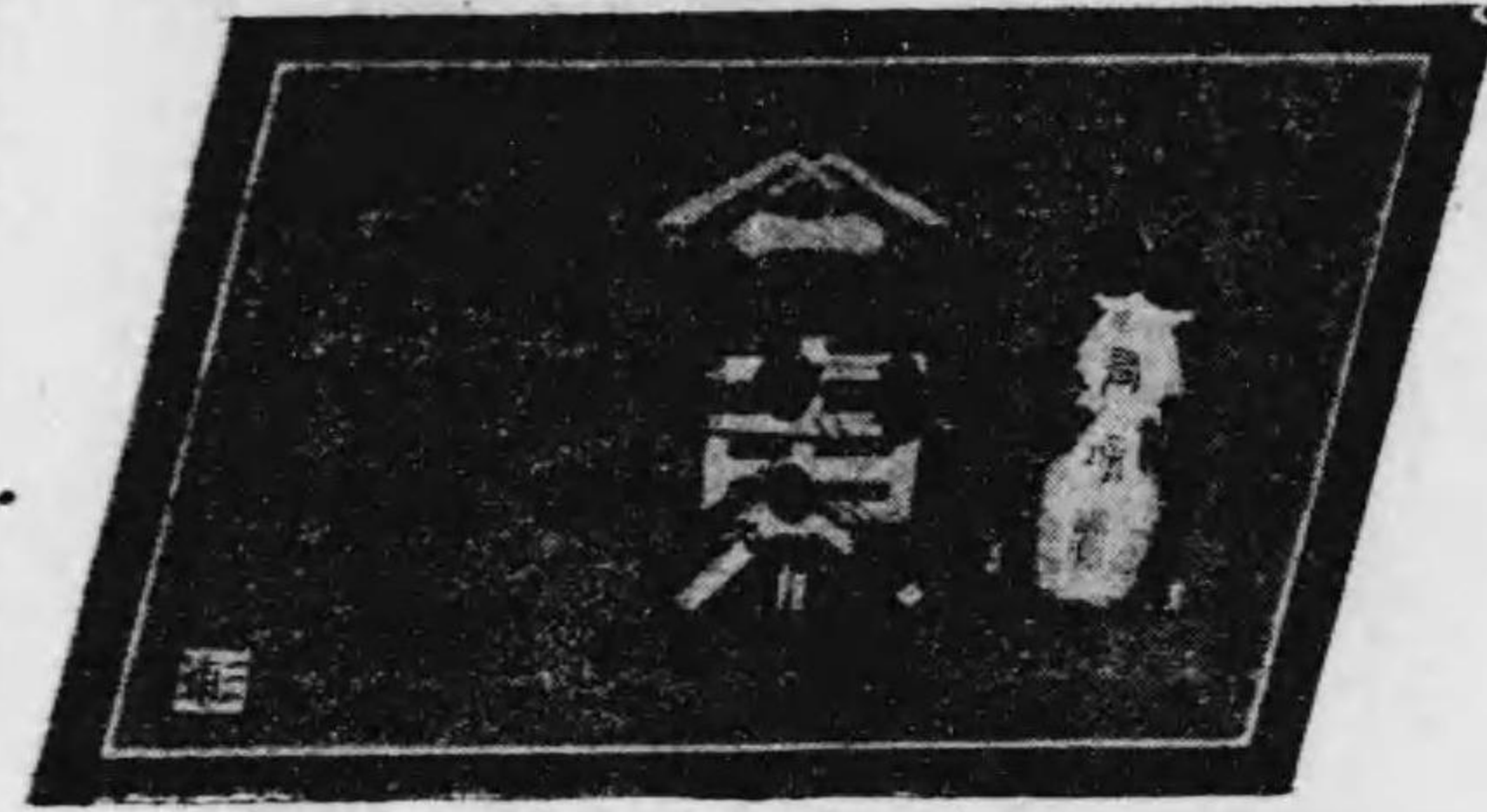
(電 署 ○ ケ ン)

北海道室蘭港海岸町一番地

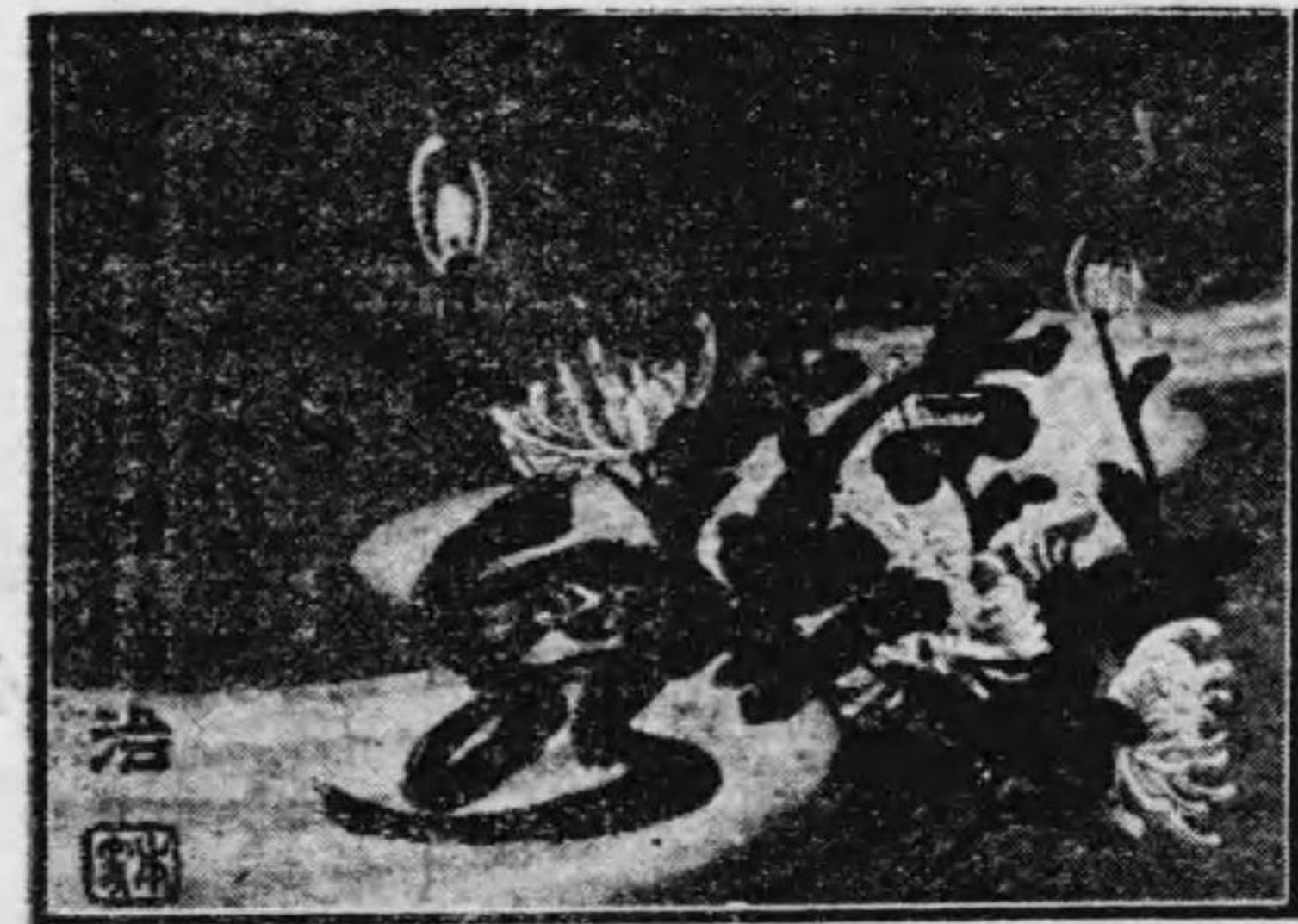
大 嶋 支 店



各博覽會評品會受賞



銘酒東正宗



釀造元



三浦喜代治

秋田縣新屋町

柳の湯



効能

腺病、癩癩、疥癬、環癬、打撲、打挫、
風濕、痛風、脚氣、勞瘵、貧血症、

右試驗成績により鑑定す

明治九年九月

秋田縣太平學校化學教員 飯沼長藏
秋田病院副院長 柳元永

木材商 溫泉宿 渡邊儀右衛門



元造製粉玉白
堂福大
郎太福塚大
町屋新縣田秋

米穀販賣商
海產物委託

白玉粉製造元

三 大門三之助

羽後國新屋町

トシメトーパデ
式アトス

町長手土市田秋

店本日田新

(四一四) (七三一) 話電

三二五三一京東壠口替販

廣小路油繪大廣告を看板とし
て官衙市場に接近し縣下第一
の店舗

衣食住に必要な呉服太物雜
貨洋貨各階級を通じ準備澤山

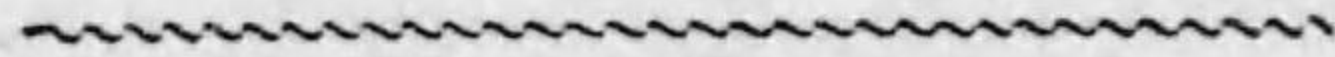
品質優良内外の嗜好に倣ひ本
縣流行界の魁を以て自任す



醬 味 生

油 噌 酢

釀 造 元



秋田縣新屋町

高橋九郎左衛門



御 料 理

海 水 浴 場

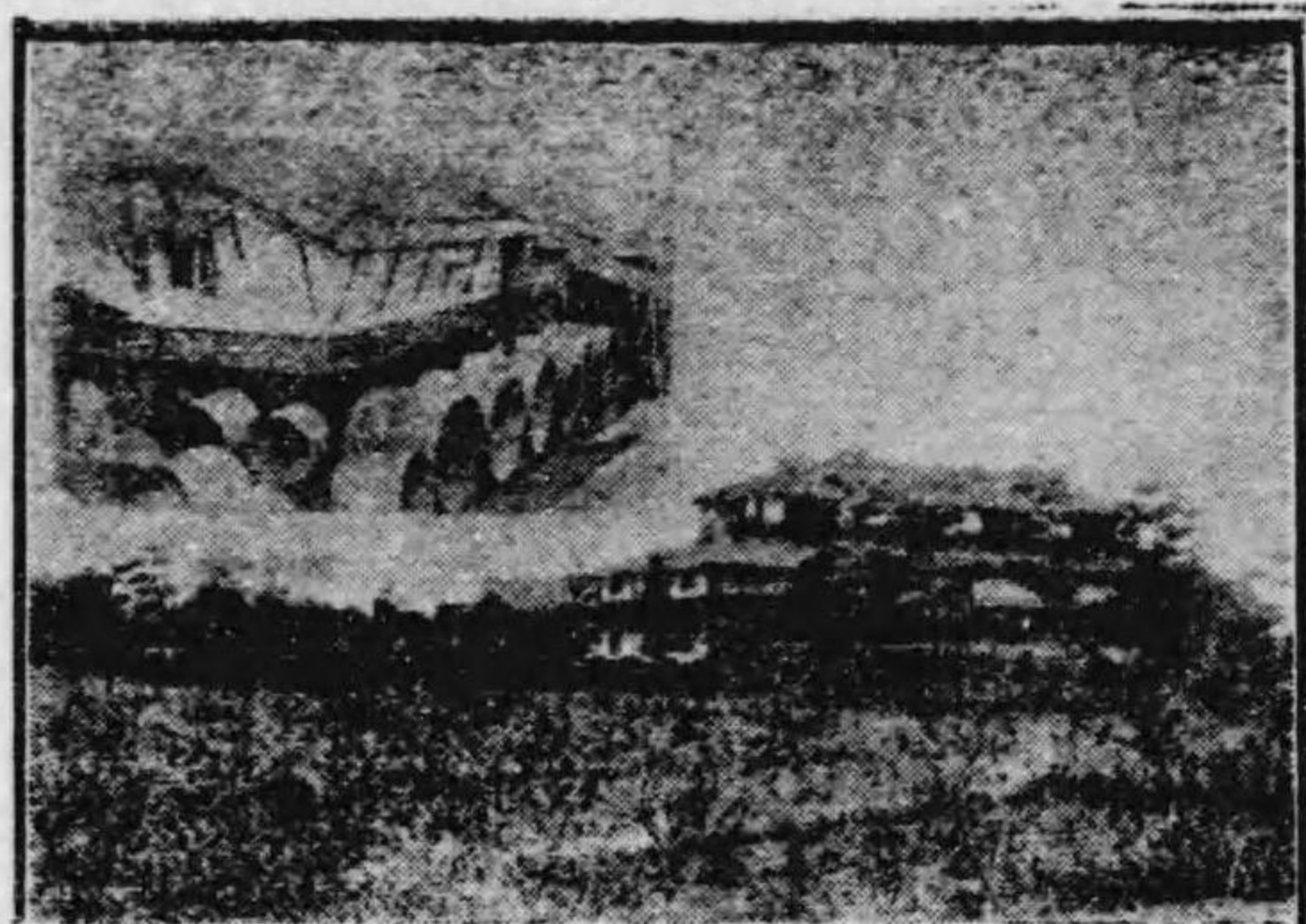
新 屋 海 濱



高 嶋 海 水 館



大日本蠶絲會有功牌受領



銘酒 勝平 釀造元



渡邊 幸四郎

秋田縣新屋町

蠶種製造販賣

春蠶種 金城又昔 秋蠶風穴織

代價框製一枚五拾錢

種ヶ嶋新屋



耐凍人造石々燈籠
研出人造石テーブル
及浴槽洗面器象眼
模様附浴室用敷石等製作業

秋田縣新屋町

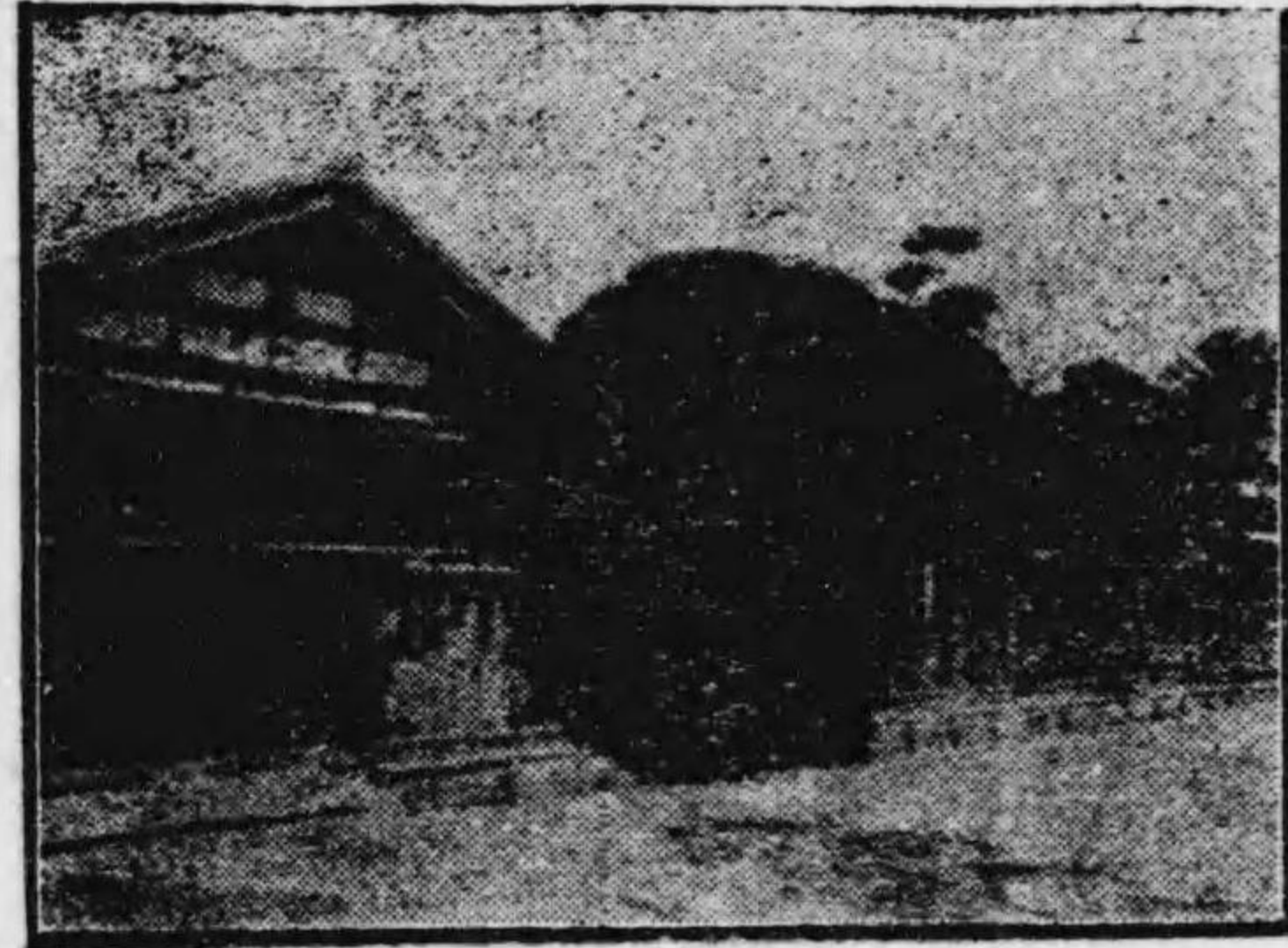
富野專太郎

羽後
本場
蠶種業

秋田縣新屋町

百農館
佐々木百太郎

振替東京二四四七七番
電略(サ、キ)又ハ(サ)

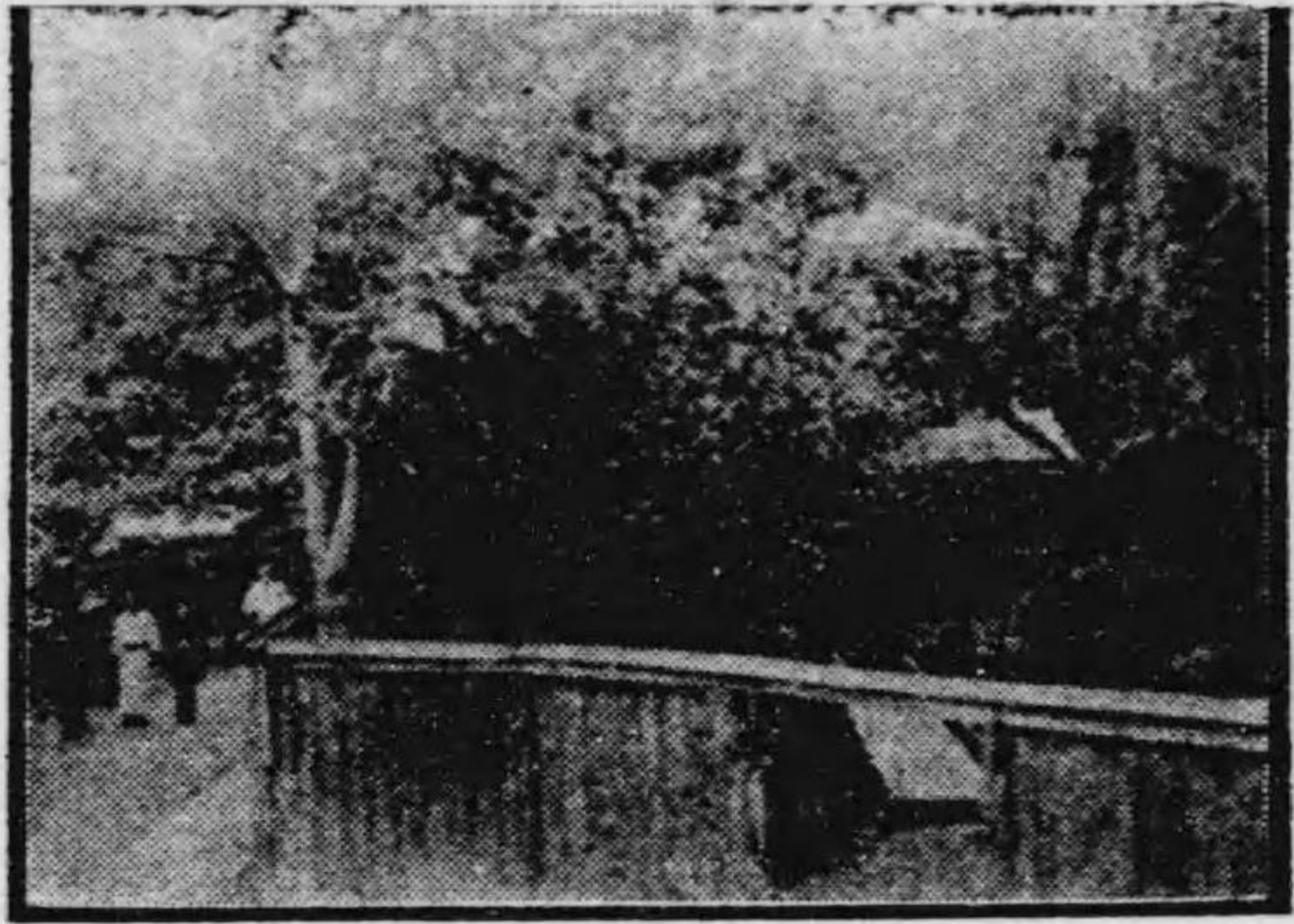


醬油
玉椿
山櫻
清正

秋田縣新屋町

釀造元
天
大門彦右衛門
電略(タイヒヨ)又ハ(ヒヨ)

味噌
生酢



御料理

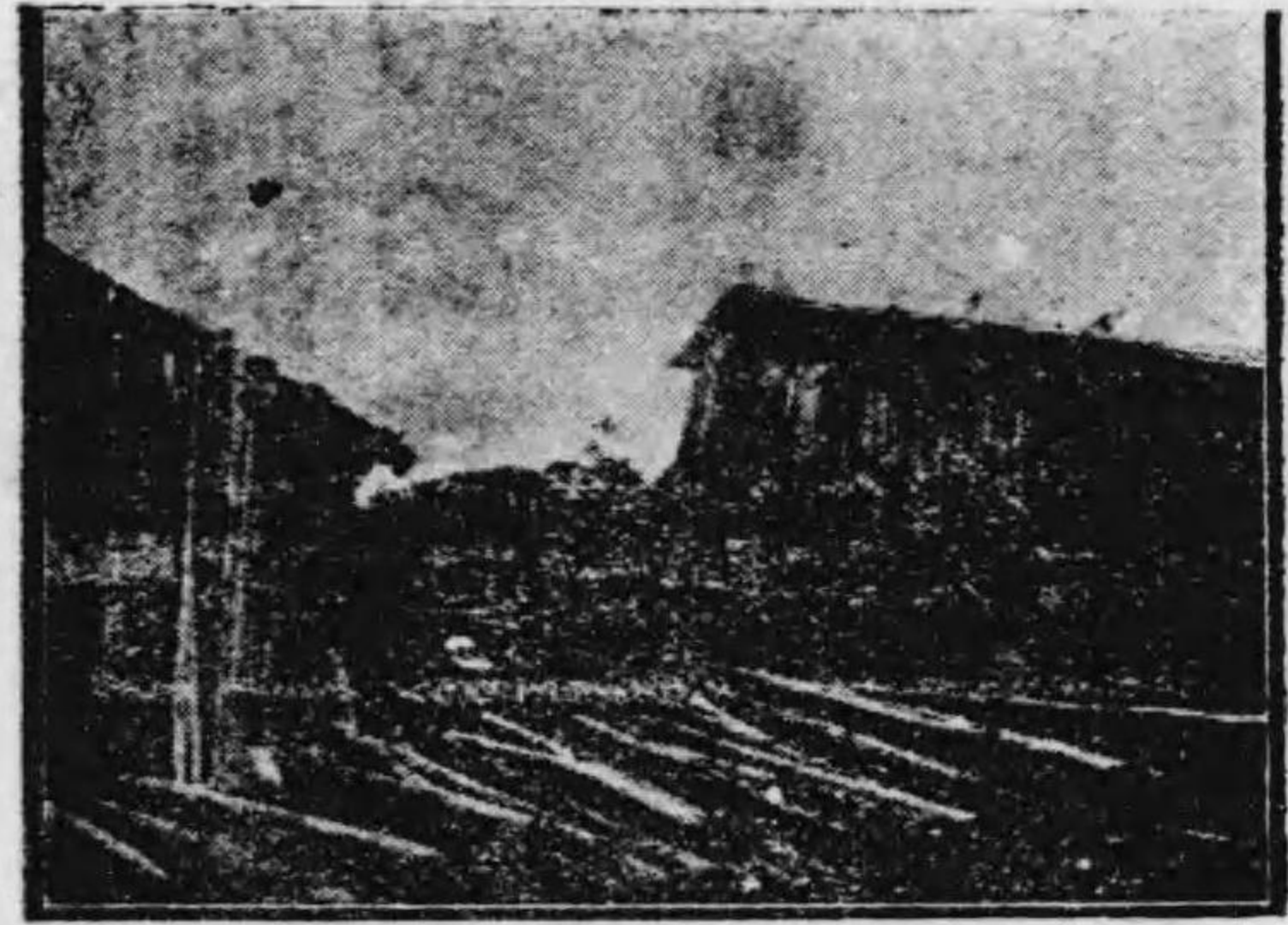
秋田縣新屋町

三浦亭

銘酒
千歲黃金井

秋田縣新屋町

釀造元
高橋清兵衛



杉丸 杉挽材 各種販賣

商標



佐藤與七

秋田縣新屋町
電話略(夕)

米雜穀
取扱商
大澤榮太郎

羽後國新屋町

農產種子
萬荒物雜穀商
菅製物

宮腰商店

河邊郡新屋愛宕町三〇八番

度量衡器
萬小問物
荒物煙草
學校用品
瀨戶物商
種物肥料

富渡邊富藏

秋田縣河邊郡新屋町

屋號大五郎

電畧(トミ)又ハ(ト)

米穀海產
賣買
物委托

商仲買人

福田龜藏

秋田縣新屋町
電略(カ又乙)



岩谷醫院

秋田縣新屋町

伏閑見院宮宮兩殿下獻上



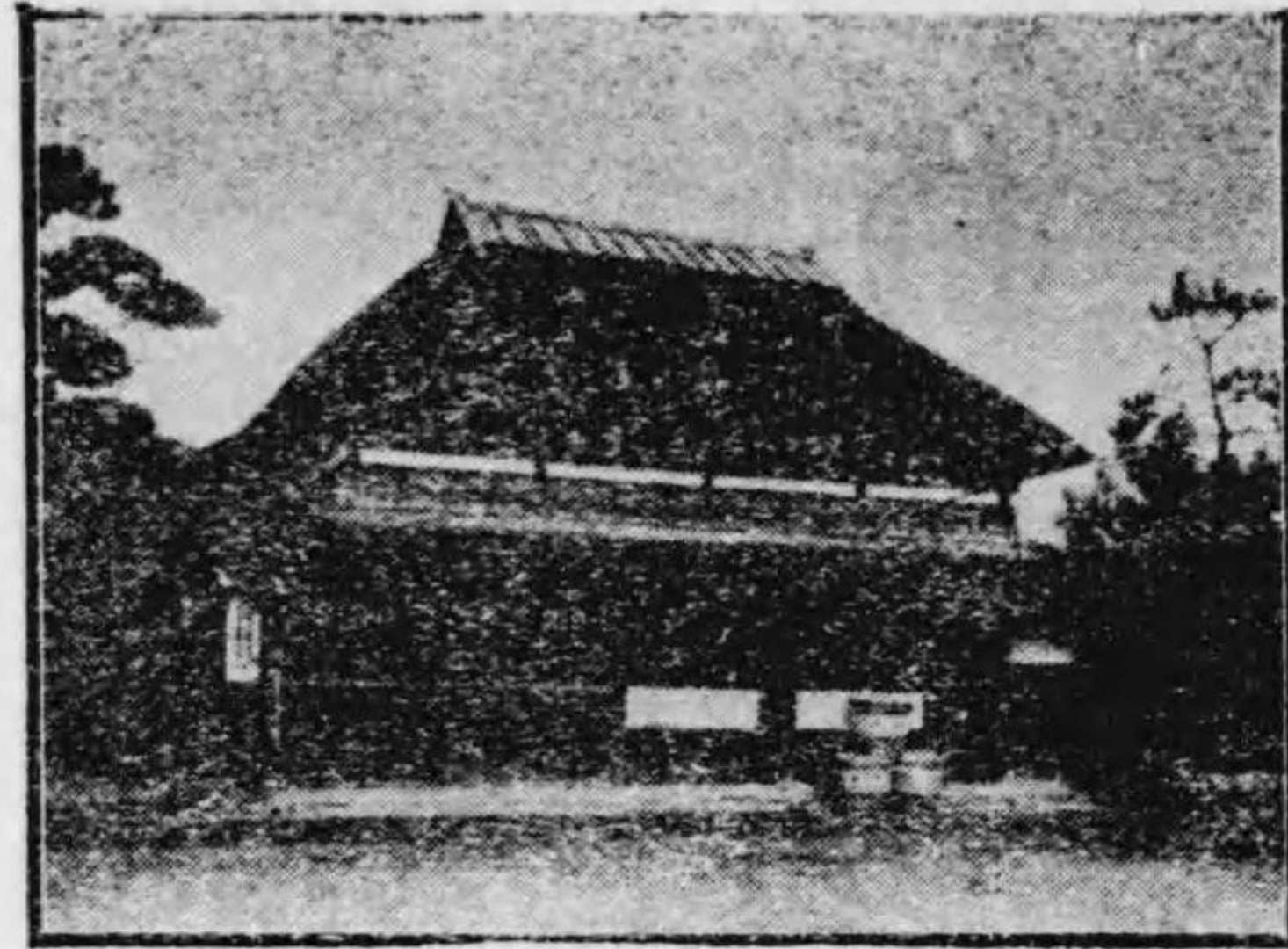
明治十年內國勸業博覽會褒賞受領
第三回勸業博覽會褒賞受領
東京勸業博覽會褒賞受領
大正博覽會三等賞受領
其他各博覽會ニ於テ有功賞受領

開新屋諸越

石井松聲堂

河邊郡新屋町

創業明治十一年



銘酒
英菊
雄水
釀造元

加
森川
祐太

秋田縣新屋町



油 醬
山 朝 大 敷
櫻 日 和 嶋
釀 造 元

秋田縣新屋町

森川九十郎



海水浴旅館

大塚蓬萊亭

新屋海濱



避

暑

適

地

海水浴

旅館

三浦海水館



新

羽後國新屋町
精米所

海水浴
旅館

秋田縣新屋町海濱

大門海水館

339
5107

生 味 醬

酢 噌 油

元 造 釀

秋田縣新屋町

仙 葉 善 治

3139
1
507

終

